

6. 笠師保の若年層の人口減少

節 思 斯 依 (ジ ン ス ・ イ)

- I. はじめに
- II. 小学生の人口減少とその背景
- III. 子供の人口減少の影響
- IV. おわりに

I. はじめに

私が初めて笠師保にいったのは2000年の7月のことである。最初の印象は、どこへ行っても子供たちの姿をなかなか見かけないことだった。笠師保にある小学校の大きな建物と運動場を見て、この小学校ではおそらく少なくとも200から300人の生徒がいるだろうと思った。しかし実際に聞いてみると、現在の生徒の数はそれよりはるかに少ないことがわかった。

私は中国の一番西の新疆ウイグル自治区のウルムチ市というところから日本に来た。ウルムチ市では1つの小学校に何百人も生徒がいるのは普通のことだ。どの学校も1つのクラスで40人前後の生徒がいて当然のこととなっている。中には生徒の数が多すぎて教室が足りないので、1つの教室を午前と午後の2回にわけて使っている学校もある。午前は低学年の生徒の授業を行い、午後は高学年の生徒の授業に使う、といった具合である。こうした環境に育った私には、日本の農村で小学校の生徒がこれほど少ないとは思ってもよらなかった。

今回調査を行う前にも、日本の農村における少子化、過疎化や高齢化などの現象が進んでいることはある程度知っていたが、調査が進行するにつれてその状態が大変深刻になっていることをあらためて感じさせられた。そこで、ここでは笠師保における若年層の人口の変化、特に近年までの減少の様子やその背景について考察する。

II. 小学生の人口減少とその背景

笠師保小学校には、2000年4月1日現在で57名の生徒がいる。ひとクラスには10人前後ということになるが、生徒数の減少にともない、1999年度から2、3年生が1つのクラス

に編成される複式学級となっている(表-1)。このまま笠師保小学校が維持された場合には級が増えることになる。

小学生の生徒数は、近年一貫して減少傾向にある。表-2は1941(昭和16)年からの卒業生の数を5年ごとの平均値として示したものである。これを見ると1940年代から60年代後半までは30～40人台で推移し、1950年代後半にピークに達した後、徐々に減少に転じる。そして1970年代後半からは20人前後、1990年代からは15人ほど、といった具合に減少の度合いを強めている。これは卒業生だけの数字であるから、小学校の生徒数全体でいえば、1950年代後半が最も多くて250人近い生徒がいたのが、その後その4分の1まで減少してきたことになる。

小学生の数が減少しはじめた背景には、全国的に見られるようになった少子化の傾向と、笠師保地区における過疎化、高齢化という3つの問題がある。少子化については、たとえば笠師保地区の世帯平均人数の推移を見ると、1950年には世帯数が354世帯、人口が1839人で1世帯当たり5.19人だったのが、2000年には世帯数311世帯、人口1133人と1世帯当たり3.64人に減っている(第1章の表-1より)。この減少がそのまま1組の夫婦が持つ子供の数の減少を示しているとはいえないが、その要因の1つになっているとはいえるだろう。

また表-3は1968(昭和43)年から1998年までの笠師保地区における出生数と、2000年現在の居住者数でその年代の出生者をまとめたものである。これを見ても出生者は1973年までは20人前後あったのが、1991年以降は10人以下まで落ち込んでいる。

子供の数の減少には、一般的な少子化の傾向のほかに、この地区の過疎化、高齢化という要因がからんでいる。出生数の減少は、1組の夫婦が生む子供の数が減っただけでなく、子供を産む世代の人数が減っていることにもよる。つまり成年に達した若者が、就学や就労のために都市部へ移住し、そこで家族をもって子供を産むことが多くなったために、地区内での出生数が減っているということである。

表-1 笠師保小学校の児童数の推移について

年 度	児 童 数	教 員 数	備 考
1 9 9 0	90	9	
1 9 9 1	96	9	
1 9 9 2	98	9	
1 9 9 3	96	9	
1 9 9 4	99	9	
1 9 9 5	97	9	
1 9 9 6	88	9	
1 9 9 7	74	9	
1 9 9 8	66	9	
1 9 9 9	61	9 *	複式学級1
2 0 0 0	57	9	複式学級1、特殊学級1
2 0 0 1	48	8	複式学級2、特殊学級1
2 0 0 2	47	8	複式学級2、特殊学級1
2 0 0 3	47	8	複式学級2、特殊学級1
2 0 0 4	48	9	複式学級1、特殊学級1
2 0 0 5	43	7	複式学級2

笠師保小学校資料より

2002年以降は、笠師保小学校がそのまま維持された場合の推定値

* 内地留学者を除く

表-2 笠師保小学校の卒業生数(1941～2000年)

年	人 数	5 年 毎 の 平 均	年	人 数	5 年 毎 の 平 均	年	人 数	5 年 毎 の 平 均	年	人 数	5 年 毎 の 平 均
1941	35	39.8	1961	43	37.0	1981	23	20.8	2001	11*	
1942	41		1962	38		1982	21		2002	9*	
1943	30		1963	35		1983	15		2003	7*	
1944	45		1964	34		1984	25				
1945	48		1965	35		1985	20				
1946	30	36.6	1966	40	35.2	1986	15	17.0			
1947	39		1967	31		1987	17				
1948	39		1968	32		1988	21				
1949	47		1969	36		1989	17				
1950	28		1970	37		1990	15				
1951	37	43.4	1971	22	23.4	1991	12	15.0			
1952	41		1972	25		1992	15				
1953	53		1973	33		1993	10				
1954	44		1974	21		1994	17				
1955	42		1975	18		1995	21				
1956	36	45.4	1976	22	19.6	1996	21	15.0			
1957	39		1977	22		1997	14				
1958	50		1978	14		1998	12				
1959	51		1979	15		1999	12				
1960	51		1980	25		2000	16				

笠師保小学校保管資料より

* 推測数

表-3 笠師保地区の出生数

出生年	年齢	出生数	居住者数	出生年	年齢	出生数	居住者数
1968	32	17	6	1984	16	11	17
1969	31	20	10	1985	15	18	21
1970	30	21	8	1986	14	18	14
1971	29	18	8	1987	13	10	14
1972	28	20	10	1988	12	19	11
1973	27	16	12	1989	11	19	14
1974	26	11	9	1990	10	11	7
1975	25	11	8	1991	9	6	11
1976	24	20	11	1992	8	7	5
1977	23	15	15	1993	7	8	8
1978	22	18	12	1994	6	7	6
1979	21	17	16	1995	5	5	7
1980	20	9	8	1996	4	6	7
1981	19	14	12	1997	3	7	9
1982	18	12	13	1998	2	8	6
1983	17	16	16				

出生数は『広報なかじま』に、2000年現在の居住者数は町役場資料による

また、20歳代前半までの人数は、該当する小学校の卒業生数および出生数とさほど変わらないが、20歳代半ば以上の年齢においては、在住者の人数が小学生の卒業生数や出生数より半数以下になっていることがわかる。ただし大学などへの就学で親元を離れている場合でも住民票を移さないままにしていることがあるので、表-3の20歳前後の数字は実際に地区に暮らしている人数より多くなっている可能性がある。また表-3には地区外から婚入してきたものも含まれているから、特に20歳代以上の数字に関しては、笠師保に生まれ育った人で現在も居住している人数はさらにこれより少ないことになる。

Ⅲ. 子供の人口減少の影響

地区の人々の話によると、子供の数が減っていることによって、祭りのあり方にも影響が出ている。たとえば笠師の南側で行われてきた獅子舞は、以前は男の子だけで演じられていたが、それでは人数が足りなくなり、今では女の子もそれに加えられるようになっている。また神社の夏祭りでも、キリコを担ぐ人数が足りないために、隣の村の子供を借りてきてキリコを出すのを維持している、という話も聞いた。あるいは子供の数が減ったために、子供用のキリコを出すのをやめたという例もある。さらにある集落では子供会そのものがなくなってしまったという。

補充調査で小学校を訪れたとき、教頭先生の案内で1階から3階までの教室、コンピューター室、手工室、音楽室、放送施設、また広くて明るい体育館などを見学することができた。こうした先進的な設備の備わる学校が、近い将来に廃校になるというのはとても残念に思えた。

1999年から始まっている複式学級は、先生にとっても生徒にとっても大変なことと思う。複式学級の教室には黒板が2つ設置されており、先生は授業の時、まず前方の黒板で2年生に授業をし、その後で教室の側面に設定された黒板に移動して、そこで3年生向けの授業をする。先生にとっての負担も大きいし、生徒にとっても決して効率がいいとは言えないあり方である。

子供の数の減少は、その他の面でもいろいろな制約が出てくる。たとえば毎月第1・第3土曜日に催されている子供かがり火太鼓教室も、参加する子供の数が多ければ、遊びとしても面白いし、そこでいろいろ勉強になることを学ぶことも多くなる。しかし現在では子供の数が少なくて、少しさびしいという声が聞かれた。

遊び自体も変わってきている。以前に比べて、今の子供たちの行動範囲は狭く、家にいる時間が多い。休みの時にも家で一日中ゲームばかりしていて、体を動かすことが少ない。外に出てみんなと遊ぶことが少なくなっているが、それも一つには近くに遊ぶ相手が

少ないことが要因となっている。遊びばかりでなく、学校の体育での対抗競技や、祭りでの盆踊りもまたできなくなりつつあるという。同世代同士の競い合いや、大人たちに混ざっての踊りの参加は、楽しい思い出になると同時に、子供にとって大切な経験の場でもあったはずだが、そうした機会が少なくなっていることは残念なことである。

IV. おわりに

ここでは調査の際の聞き取りや各種資料から、笠師保地区における若年層の人口減少の様子とその影響を見てきたが、それが地域社会のバランスに大きな影響を与えていることは明らかである。地区の人々はこのことに強い関心を示し、将来はどうなるかと心配している人もいれば、時代の流れかなと思いつつがっかりしている人もいる。しかし、地区内での就労の場の問題など、住民の力だけで今の減少を根本的に変えることは容易ではない。地区を超えて、町なり県なりのこの問題に対する取り組みが必要なように思われる。